

三郷俳句塾(十二月会・第十一期第九回目講座)

【日時】令和元年十二月二十一日(土)

【場所】瑞沼市民センター

【参加者】稲田眸子、石崎洋子、磯野ヨシ、上田雅子、太田 孝

小野紗耶子、桑原和久、斉藤満喜栄、高橋敏恵

中井川恭子、中田麻沙子、能川はるを、橋本喜代志

早川恵美、平林益雄、御沓一敏、宮川洋子、村田文雄、

村山邦保、山本万象

〔欠席投句〕荒木輝二、松田明子、牧野政良

【兼題】鉄

【投句・選句】四句投句、五句選

◇秀句ギャラリー選評

稲田眸子

下町の除夜の風呂屋の湯の濁り

山本万象

東京下町に住んでいたという人から幼い頃の思い出話を聞いた。

「その頃はほとんどの家に風呂がなく銭湯通いであった。商売をしていたので、夜、店を閉めてから父や母に連れられて銭湯に行った。番台には馴染みの風呂屋のおばあさん。籐の籠に衣服を脱ぐ。蛇口は丸くて湯(赤)と水(青)の二つのボタン、押すと湯や水が

でるので交互に押し湯加減を調節したもの。桶も椅子も木製。湯船にはもちろん富士山と白浜。母はたいい近所のおばさんと世間話を始めた。湯あがりには 天井の扇風機が気持ちよく、牛乳を買ってくれた」と。

そんな他愛もない思い出話であるが、聞いているうちに、ほっこりとしてきた。下町に住んだことはないが、この句を味わっている

と、歳晩の下町の賑わいが妙に生々しく伝わってくる。それは、下五の「湯の濁り」の言葉の効果であろう。絶妙な措辞である。

何がある祈りの他に冬銀河

太田 孝

仏壇や神棚があった昔の日本人と異なり、多くの日本人はこの世を越えた神や仏には無関心で、神仏に祈る生活とはあまり結びつきがない。しかし、そういう現代人でもこの世を越えた超越者の存在を感じることもある。大自然の美しさ、懐の広さ、脅威を感じた時、貴い出会いや体験をした時、辛く苦しい時、そんなときは、祈りの言葉が思わず口から零れ出る。それは、すべての人の心に祈りの心があるからであろうか。

厳冬の澄みきった漆黒の空に、大河のように細かい星影を流す冬銀河の記憶。それを打ち仰いでいると、己が小ささと、大自然の大きな力を感じる。

この句、作者の知人が難病に侵され、あらゆる手を尽くした。あとは神に祈るしかない：そんな思いを「何がある祈りの他に」と表現したのであるうか。

着ぶくれて一人はみ出す五人掛け

早川恵美

寒くなると、コートやジャケットが活躍し始める。中でもダウンや綿の入ったジャケットは、体温を逃がさずとても暖かくなる。これが込み合う原因になっている。夏場は百人乗っていた電車でも、着膨れした人が増えてしまうと九十人しか乗れないデータもある。

この句は、満員電車ではないが、そこそこ混んでいる乗車状況を想像。五人掛けの座席の残り一席に、いつものように座ろうとするが、なかなか座れない。座ろうとしているお尻がはみだしてしまいそうなのである。

なんとか座ろうとしている五人目の人(ひつよ)としたら作者かも

知れない)、席を詰めようとしなない四人の仕草まで想像でき、ほほえましく、少し哀れな人間の性を垣間見たような気がする。

鉄瓶の湯気はおしやべり火鉢の間 石崎洋子

冬將軍が窓を揺らす冬。火鉢を置いた居間で、炭火を見ながら、自分の時間をゆつたりと愉しむ。鉄瓶の湯気が炭火を受けて吹き上がる。少し火箸を動かして炭火を宥める。炭の音、灰汁が飛ぶ。火が動く。鉄瓶の湯気が発する「シュー」という音や、ほんわかとした湯気の立ちのぼる様子等を眺めていると、心が寛ぎ、様々な思いが出が蘇ってくる。

この句は、鉄瓶の湯気が発するさまざまな音を「おしやべり」と感じ、そう表現した。童話の中に引き込まれてしまいそうな措辞。このような感性をこれからも忘れないようにしてほしいものだ。

年の暮吾持ちたきや鉄の意思
枯れ木ばかり高遠の街とぼとぼと
凧や鉄骨組まれ変る町
有刺鉄線越へて獣ら柿を盗る
日向ぼこ覗いてみたき地獄かな
小春日や落語を聞きに公民館
柿入れて冬のサラダの華やかに
じいじまたあそぼの手紙冬ぬくし
リビングに猫と女とシクラメン
鉄橋を渡る貨物車冬冬ざるる
日溜りに焼芋談義女達
留守番は炉の鉄瓶と居眠り婆
日脚伸ぶ鉄路一筋義兄の遺稿
鉄棒になめくじそろり冬ぬくし
秋出水血管をゆくカテーテル

荒木輝二
荒木輝二
石崎洋子
磯野ヨシ
上田雅子
上田雅子
上田雅子
太田 孝
小野紗耶子
斉藤満喜栄
斉藤満喜栄
高橋敏恵
高橋敏恵
中井川恭子
中田麻沙子

ストーブの子ども食堂賑やかに
晩学といふ言い訳や冬堇
ポインセチアきれいにできた目玉焼
アフガンの砂漠の水路冬の蝶
火恋し足場組み上ぐ鉄パイプ
若水の茶を愛で合ひ夫婦恙なし
山茶花やよちよち歩く影を追ふ
鉄板の切断の音冴ゆるなり
ハクシヨンてふ大きな声や冬の朝
我が肺はまだ元気なり息白し
鉄条網潜りし先の大枯野
歩ければとぼとぼで良い冬の道
半額の赤紙貼られ年の暮
返信を待ちある日々の冬曇
鉄瓶や火鉢の猫のうとうとと
鉄塔に動く人影冬の空
赤映えて山影青し冬夕焼け
ポインセチア血液検査鉄不足
出初式逆さ筑波を見遣る鳶

◇投句◇

もたれ合ひ重なり合うて菊枯るる
錆を噴く鉄条網や基地の冬
片減りの寺の石段冬の雨
我もまた迷へる羊聖夜劇
娘二人イタリア娘羽子板市
冬朝日吾は巨人となりにけり
年の暮吾持ちたきや鉄の意思
枯れ木ばかり高遠の街とぼとぼと
鉄瓶の湯気はおしやべり火鉢の間

能川はるを
能川はるを
橋本喜代志
橋本喜代志
牧野政良
牧野政良
松田明子
松田明子
御沓一敏
御沓一敏
御沓一敏
御沓一敏
宮川洋子
宮川洋子
村田文雄
村田文雄
村山邦保
山本万象
山本万象
稲田眸子
稲田眸子
稲田眸子
稲田眸子
荒木輝二
荒木輝二
荒木輝二
荒木輝二
石崎洋子

山茶花やよちよち歩く影を追ふ
 金網に寄り添ひながら菊枯るる
 鉄板の切断の音冴ゆるなり
 ハクシヨンてふ大きな声や冬の朝
 我が肺はまだ元気なり息白し
 鉄条網潜りし先の大枯野
 歩ければとぼとぼで良い冬の道
 半額の赤紙貼られ年の暮
 返信を待ちゐる日々の冬曇
 銀杏散るじゃんけんぼんの児等にちる
 土砂崩れ通行止めの冬ざるる
 鉄火井山葵醤油をとろとろり
 鉄瓶や火鉢の猫のうとうとと
 鉄瓶の湯気しゅんしゅんと長火鉢
 鉄塔に動く人影冬の空
 鉄階の音に目覚めし冬の朝
 夜勤明け木の葉の上の霜の花
 赤映えて山影青し冬夕焼け
 静かなり煙棚引く冬田かな
 ポインセチア血液検査鉄不足
 形代に楷書の記名年の夜や
 出初式逆さ筑波を見遣る鳶
 下町の除夜の風呂屋の湯の濁り

次回兼題 【一令】

【編集・村田文雄・稲田眸子】

松田明子
 松田明子
 松田明子
 御沓一敏
 御沓一敏
 御沓一敏
 宮川洋子
 宮川洋子
 宮川洋子
 宮川洋子
 宮川洋子
 宮川洋子
 村田文雄
 村田文雄
 村田文雄
 村田文雄
 村田文雄
 村山邦保
 村山邦保
 村山邦保
 村山邦保
 山本万象
 山本万象
 山本万象

